

平成18年12月5日公表

平成18年産水陸稲の収穫量

——— 収穫量は前年比8%減 ———

【調査結果の概要】

鹿児島県における平成18年産水陸稲の収穫量は、水稲が11万1,400 t、陸稲が99 t、水陸稲合計では11万1,500 tとなり、前年産に比べ9,100 t（8%）減少しました。

これは、水稲の作付面積が200ha減少したのに加え、作柄において、早期栽培は作況指数99であったものの、普通栽培では、初期生育期の日照不足と登熟期の台風等の影響による天候不順、病害の多発生等により、作況指数88となったためです。

第1表 平成18年産水陸稲の収穫量

区 分		作 面 積 ha	10 当 たり 収 量 kg	収 穫 量 t	作 況 指 数	前年産収穫量との差	
						対 差 t	対 比 %
水 陸 稲 合 計		25 600	—	111 500	—	△ 9 100	92
水 稲	平. 18 水 稲 計	25 600	435	111 400	91	△ 9 100	92
	早期栽培	6 340	435	27 600	99	△ 1 600	95
	普通栽培	19 300	435	84 000	88	△ 7 500	92
	17 水 稲 計	25 800	467	120 500	98	—	—
	対前年差	△ 200	△ 32	△ 9 100	—	—	—
区 分		作 面 積	10 当 たり 収 量	収 穫 量	前年産収穫量との差		
					対 差	対 比	
陸 稲	平. 18 陸 稲 計	46	215	99	△ 9	92	
	早期栽培	37	219	81	△ 5	94	
	普通栽培	9	200	18	△ 4	82	
	17 陸 稲 計	48	225	108	—	—	
	対前年差	△ 2	△ 10	△ 9	—	—	

- 注：1 普通栽培には、二期作を含みます。
2 計と内訳は、ラウンドのため一致しない場合があります。
3 表中の「△」は、減少したことを示します。（以下の各表についても同じです。）

この統計調査結果で使用している統計表は、九州農政局鹿児島農政事務所ホームページ中の「数字で見る農林水産業」に掲載しています。【<http://www.kagoshima.info.maff.go.jp>】

この統計調査における調査目的、調査対象などの調査仕様は、【調査の仕様】P7に掲載しています。

【解説】

1 水 稲

(1) 早期栽培

ア 作付面積

作付面積は6,340haで、前年産に比べ20ha (0.3%) 減少しました。

これは、生産者の高齢化や後継者不足によるものです。

イ 作柄概況

田植最盛期は、育苗期間の低温と関係機関の移植期適正化の指導により、平年より2日遅い4月2日となりました。

苗の活着（根付き）は、植え付け後の低温・強風により、抑制された地域はみられたものの、主要作付地帯の大隅半島地帯が平年並みであったことから、総じて平年並みとなりました。

茎数は、主要作付地帯の大隅半島地帯では、田植え期以降おおむね天候に恵まれ、分けつが旺盛であったことから、やや多く確保されたものの、その他の地帯では、植え付け後の悪天候により初期生育が抑制され、やや少なくなったことから、総じて平年並みとなりました。

出穂最盛期は、初期生育の遅れにより、平年に比べ5日遅い6月27日となりました。

穂数は、一部穂揃いの悪いほ場はあったものの、茎数が平年並みであったことから、平年並みとなりました。

1穂当たりもみ数は、熊毛・大島地帯で、幼穂形成期の日照不足により、やや少なくなったものの、大隅半島地帯は平年並みに確保されたほか、薩摩半島地帯では、幼穂形成期の高温・多照に加え、穂数が少なかったことによる補償作用により、やや多く確保されたことから、総じてやや多くなりました。

全もみ数は、1穂当たりもみ数はやや多く確保されたものの、穂数が平年並みとなったことから、総じて平年並みとなりました。

登熟（実入り）は、出穂後7月上旬まで日照不足で経過したものの、7月中旬以降おおむね天候に恵まれたことから、平年並みとなりました。

被害は、5月の日照不足のほか、カメムシ等の虫害はみられたものの、台風の被害がなかったことや、いもち病等の発生が少なかったことから、総じて平年並みとなりました。

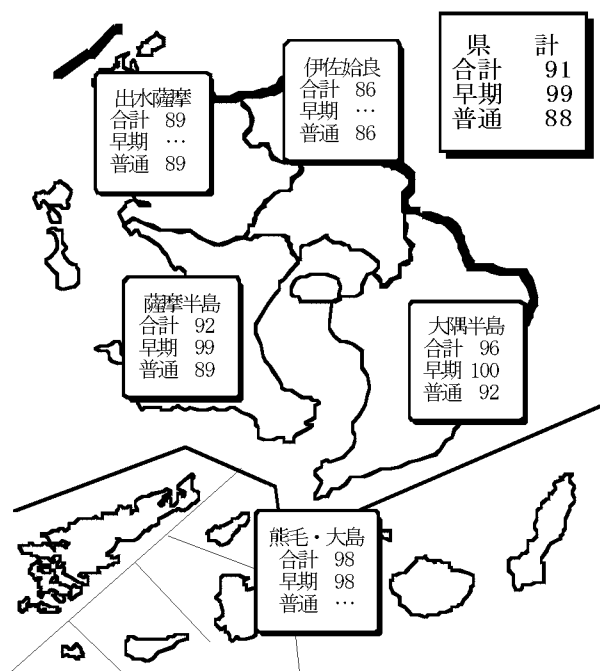
このようなことから、作況指数99となりました。

(2) 普通栽培

ア 作付面積

作付面積は1万9,300haで、前年に比べ200ha（1%）減少しました。

水稲の作柄表示地帯別作況指数



これは、生産者の高齢化や後継者不足によるものです。

イ 作柄概況

田植最盛期は、登熟期の高温障害を回避するための移植期の適正化指導があったことや、一部地域で用水不足がみられたことなどから、平年に比べ3日遅い6月20日となりました。

茎数は、田植え後、日照不足で経過したことから分けつは抑制され、やや少なくなりました。

出穂最盛期は、田植え期の遅れや初期生育期の日照不足により、平年に比べ2日遅い8月28日となりました。

全もみ数は、1穂当たりもみ数は平年並みに確保されたものの、穂数が少なかったことから、総じて少なくなりました。

登熟（実入り）は、出穂期以降の日照不足、台風第13号（9月16～17日）の襲来に加え、病害の発生も多く、やや不良となりました。

被害は、6月下旬～7月上旬及び9月上・中旬の日照不足や、7月下旬の局地的な大雨のほか、台風第13号による倒伏、籾ずれ、潮風害に加え、紋枯れ病が発生したことから、多くなりました。

このようなことから作柄は、作況指数88となりました。

2 陸 稲

(1) 作付面積

作付面積は46haで、前年に比べ2ha(4%)減少しました。

これは、生産者の高齢化や収益性の低迷による生産意欲の減退によるものです。

(2) 作柄概況

早期栽培は、は種期以降、おおむね天候に恵まれ順調な生育であったものの、5～6月上旬が日照不足で経過したことから分けつは抑制され、茎数・穂数ともに少なくなりました。

1穂当たりもみ数は、幼穂形成期が日照不足で推移したものの、穂数が少なかったことによる補償作用により、総じて平年並みとなりました。

登熟は、7月下旬～8月中旬が干ばつ気味で推移したことから、粒の肥大不良、充実不足がみられました。

被害は、日照不足、干害のほか、胡麻葉枯れ病の発生もみられ、やや多くなりました。

普通栽培は、6月下旬～7月中旬の日照不足により、穂数はやや少なくなり、1穂当たりもみ数は平年並みとなりました。

登熟は、出穂期はおおむね天候に恵まれたものの、9月の日照不足に加え、台風第13号の影響により、肥大不良、充実不足が発生し、やや不良となりました。

被害は、日照不足や台風の襲来、紋枯病、いもち病の発生により、平年に比べ多くなりました。

このようなことから、陸稲合計の10a当たり収量は215kgとなりました。

3 水稲の被害概況

水稲合計の被害量の総数は3万1,900 tで、被害率26.0%となり、平年に比べ10.8ポイント上回りました。

これは、主に台風や日照不足等の気象被害、紋枯病等による病害が多かったためです。

第2表 平成18年産水稲被害量

区 分	被 害 量	被 害 率		
		本 年	平 年	対 平 年 差
	t	%	%	ポイント
総 数	31 900	26.0	15.2	10.8
気 象 被 害	15 800	12.9	4.9	8.0
うち、風 水 害	7 690	6.3	3.6	2.7
うち、日 照 不 足	7 770	6.3
病 害	10 700	8.7	6.5	2.2
うち、いもち病	3 950	3.2	2.8	0.4
うち、紋 枯 病	5 470	4.5	2.3	2.2
虫 害	4 750	3.9	3.4	0.5
そ の 他	609	0.5	0.3	0.2

注:1 被害率は、平年収量に対する被害量の比率であり、被害の程度を表す指標です。

2 気象被害のうち、「日照不足」については、平成14年より気象被害について表章区分の見直しを行ったことから、平年差を比較していません。

【統計表】

平成18年産水稲（作柄表示地帯別）

1 早期栽培

区 分	作付面積	10a 当たり 収 量	収 穫 量	10a 当たり 平 年 収 量	作 況 指 数	収 穫 量 の 対 前 年 差
	ha	kg	t	kg		t
県 計	6 340	435	27 600	439	99	△ 1 600
うち、 薩 摩 半 島	1 700	434	7 380	440	99	△ 370
大 隅 半 島	3 210	451	14 500	449	100	△ 700
熊 毛 ・ 大 島	1 170	405	4 740	412	98	△ 380

2 普通栽培

区 分	作付面積	10a 当たり 収 量	収 穫 量	10a 当たり 平 年 収 量	作 況 指 数	収 穫 量 の 対 前 年 差
	ha	kg	t	kg		t
県 計	19 300	435	84 000	492	88	△ 7 500
うち、 薩 摩 半 島	2 840	422	12 000	473	89	△ 1 700
出 水 薩 摩	6 120	437	26 700	491	89	△ 3 200
伊 佐 始 良	6 600	439	29 000	512	86	△ 2 700
大 隅 半 島	3 690	435	16 100	471	92	0

(参考1)

平成18年産水稲玄米のふるい目幅別重量分布状況
(概数値)

この調査は、飯用に供し得る玄米の全量を把握することを目的としていることから、収量基準は、農産物規格規定三等以上の品位を有し、かつ、ふるい目幅 1.7mm以上の選別された玄米の重量としています。

なお、農家等が選別に用いるふるい目幅は、1.80mmが多くなっています。ふるい目幅の重量割合とふるい目幅別10a当たり収量は次のとおりです。

単位 { 重量割合：％
平均対差：ポイント

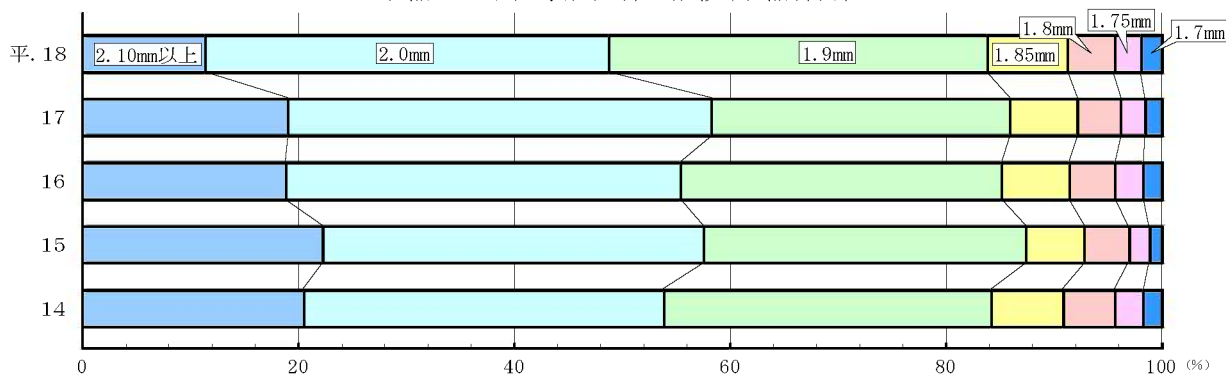
区 分	合 計	ふるい目幅					
		2.00mm	1.90mm	1.85mm	1.80mm	1.75mm	1.70mm
水稲合計重量割合	100.0	48.7	35.1	7.5	4.2	2.5	2.0
平均対差		△ 6.6	5.1	1.3	△ 0.2	0.0	0.4
早期水稲重量割合	100.0	50.2	33.5	8.1	4.4	2.2	1.6
平均対差		3.0	△ 2.2	0.7	△ 0.8	△ 0.5	△ 0.2
普通水稲重量割合	100.0	48.2	35.6	7.3	4.2	2.6	2.1
平均対差		△ 10.2	7.7	1.6	0.2	0.2	0.5

単位:kg

区 分	合 計 (1.70mm 選別)	選別ふるい目幅別10a当たり収量					
		2.00mm	1.90mm	1.85mm	1.80mm	1.75mm	
		県 計	435	212	365	397	415
地 帯 別	薩 摩 半 島	426	148	328	374	402	417
	出 水 薩 摩	435	196	359	394	415	426
	伊 佐 始 良	439	241	382	410	423	432
	大 隅 半 島	442	224	374	405	422	432
	熊 毛 ・ 大 島	405	322	378	390	397	402
作 期 別	早 期 栽 培	435	218	364	399	418	428
	普 通 栽 培	435	210	365	396	415	426

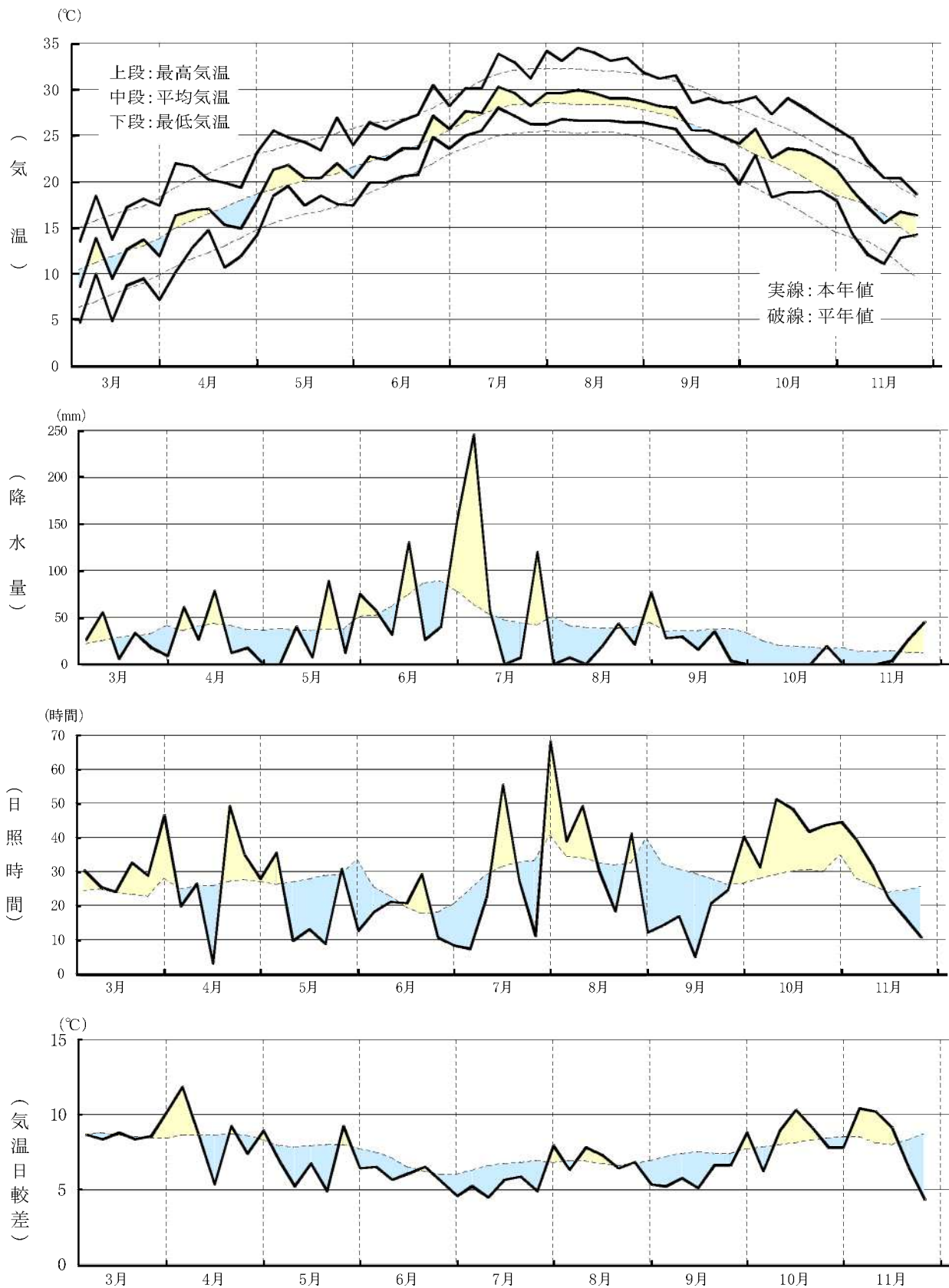
- 注:1 平均対差に用いた平均値は、直近5か年の重量割合の平均値です。
 2 選別ふるい目幅別10a当たり収量とは、表頭のふるい目幅を使用した際に得られる10a当たり収量のことです。
 3 台風等により未熟粒・被害粒等の混入が多く、農産物検査規格三等の品位に達しない場合は再選別を行っており、その選別後の値を含んでいます。
 4 表中の「△」は、平均より少ないことを示します。

水稲の玄米粒厚別割合の推移(水稲合計)



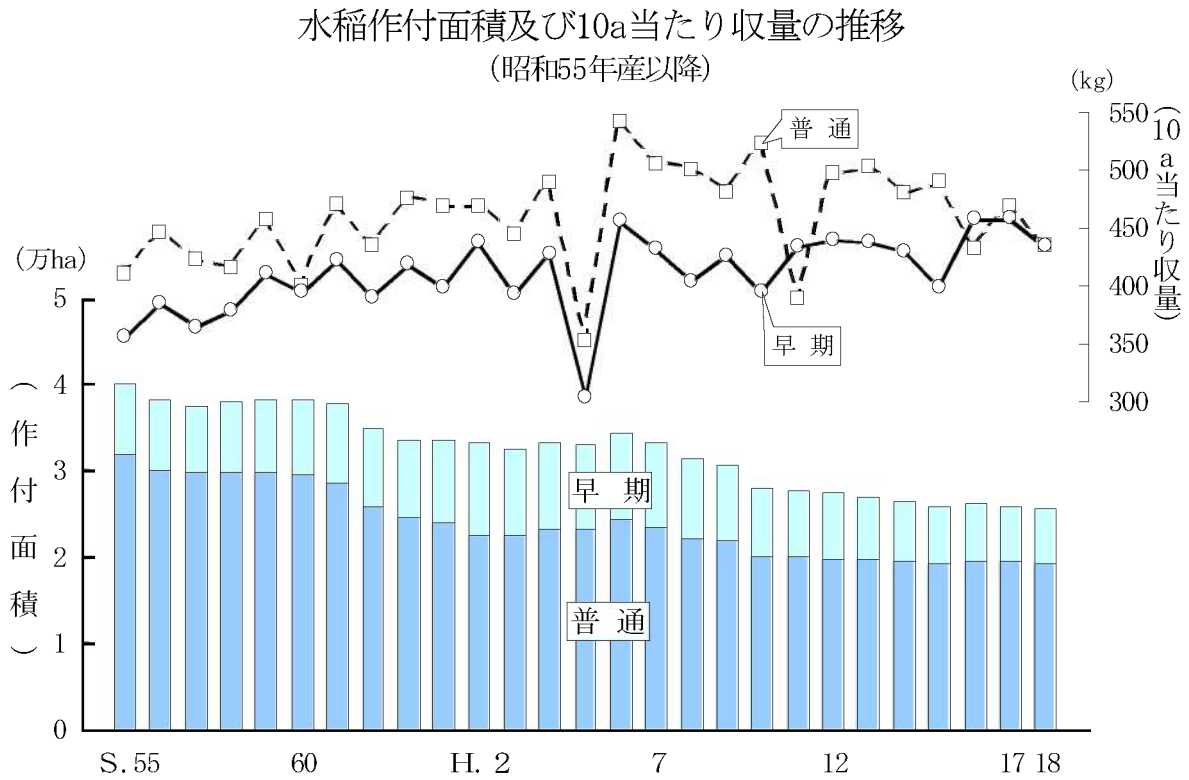
(参 考 2)

平成18年産水稻生育期間における鹿児島島の気象



資料：鹿児島地方気象台「アメダス気象データ」 観測地点 鹿児島

(参 考 3)



【調査の仕様】

- 1 本調査は、作物統計調査の作付面積調査及び稲調査の中の水陸稲の収穫量調査として実施し、水陸稲の作付面積、作柄状況及び収穫量を明らかにすることにより、生産対策、技術指導等の農林水産行政推進のための基礎資料とすることを目的としています。
- 2 作柄概況の地帯別は、主要作付地帯（1,000ha以上）を掲載しています。
- 3 作況指数とは、10 a 当たり平年収量に対する10 a 当たり収量の比率です。
- 4 要旨及び解説に用いた作柄の表示区分及び地帯区分は、次のとおりです。

表示区分

区 分	良 (多 い)	や や 良 (や や 多 い)	平 年 並 み	や や 不 良 (や や 少 ない)	不 良 (少 ない)
対 平 年 比	106 % 以 上	102 % ~ 105 %	99 % ~ 101 %	95 % ~ 98 %	94 % 以 下

地 帯 区 分

- 薩 摩 半 島 …… 鹿児島市、枕崎市、いちき串木野市、指宿市、南さつま市、日置市、鹿児島郡、揖宿郡、川辺郡
- 出 水 薩 摩 …… 薩摩川内市、阿久根市、出水市、薩摩郡、出水郡
- 伊 佐 始 良 …… 大口市、霧島市、伊佐郡、始良郡
- 大 隅 半 島 …… 鹿屋市、垂水市、曾於市、志布志市、曾於郡、肝属郡
- 熊 毛 ・ 大 島 …… 西之表市、奄美市、熊毛郡、大島郡

5 統計数値のラウンド方法は、次のとおりです。

原 数		7けた以上 (100万)	6けた (10万)	5けた (万)	4けた (1 000)	3けた (100)
ラウンドするけた(下から)		3けた	2けた		1けた	ラウンドしない
例	ラウンドする前(原数)	1 234 567	123 456	12 345	1 234	123
	ラウンドした数値(統計数値)	1 234 000	123 500	12 300	1 230	123

6 用語の解説

- 早期栽培とは、出穂期の台風被害が作柄に大きく影響するので、台風の襲来しやすい8～9月に出穂となることを避けることなどから、8月末頃までに収穫する目的で作付けされている栽培方法です。
- 穂数とは、1㎡あたりに出穂したすべての穂の数です。穂数は収量決定に当たって重要な要素の一つです。
- 全もみ数とは、1㎡当たりの全てのもみ数のことです。収量決定に当たって極めて重要な要素です。
- 登熟とは、開花、受精したのち、実が肥大し熟れていくことを登熟といいます。稲の生育状態や気象条件、病害虫などの影響を受け、収量に直接関係します。
- 10a当たり平年収量とは、水稻の栽培を開始する以前に、その年の気象の推移や被害の発生状況を平年並みとみなし、最近の栽培技術の進歩の度合や作付変動等を考慮し、実収量のすう勢を基に作成したその年に予想される10a当たり収量をいいます。
- 被害面積とは、農作物に損傷を生じ、被害なかりせば収量（その被害が発生しなかったと仮定した場合に取れ得ると見込まれる収量）から減収した面積をいいます。
- 被害量とは、農作物の栽培が開始されてから収納されるまでの期間に、災害等によって損傷を生じ、被害なかりせば収量（その被害が発生しなかったと仮定した場合に取れ得ると見込まれる収量）より減収した量をいいます。

【関連リンク】

- 農林水産政策関連ページ <http://www.maff.go.jp/kihon.html>
- 食料政策関係ページ <http://www.maff.go.jp/syukuryo.html>
- 農業生産振興関係ページ <http://www.maff.go.jp/seisan.html>

問い合わせ先

◎本統計調査結果について

連絡先：九州農政局鹿兒島農政事務所統計部
生産流通消費統計課 生産統計第2係
電 話：(直通) 099(222)7546
F A X：099(224)1501

◎農林水産統計全般について

連絡先：九州農政局鹿兒島農政事務所統計部
統計企画課 企画係
電 話：(直通) 099(222)7523
F A X：099(224)1501

